

国際シンポジウム報告書

なぜイノシシは都市に出没するのか？

～世界のイノシシ管理から学ぶ～



兵庫県森林動物研究センター
兵庫 ワイルドライフモノグラフ 8号



はじめに

兵庫県森林動物研究センターでは、ワイルドライフマネジメントに係る研究成果を広く市民の方々に知っていただくことを目的として、平成 20 年から毎年「兵庫ワイルドライフモノグラフ」を刊行しています。本年度は第 8 号「なぜイノシシは都会に出没するのか？～世界のイノシシ管理から学ぶ～」を刊行します。本号は、平成 27 年 8 月 1 日に本センターの主催により開催された国際シンポジウムの記録をまとめたものです。

六甲山のイノシシによる神戸市内での出没はもとより、山にいるはずのイノシシがなぜか都市の中をうろついたり、突如人を襲ってけがをさせるといった事件が、ときどき新聞に載ります。神戸市の問題はイノシシの餌付けによるものですが、他の現象はなぜなのか理解できません。イノシシだけでなく、クマ、サル、シカが里や町を徘徊するといった異常な現象が発生しています。日本だけの特異な現象かと思っていたら、諸外国でも同じことが頻発しているのには驚かされました。ヨーロッパでは 18 カ国 100 都市で見られ、とくにベルリンとバルセロナでは顕著だと言います。ベルリンは市内に森が多く、元々イノシシが住んでいたが、現在は 1 万頭がおり、街中をうろつくと言うことです。代々木の森に野生のイノシシが住んでいて、東京の街を徘徊することを想像すると、いかに異常事態が起こっているかがわかります。韓国でも 2011 年以来、ソウル、釜山、蔚山、大丘など、かなりの大都市に出没しています。ヨーロッパや韓国のイノシシの雄は 350 kg にもなるから恐ろしいです。

アポロニオ教授の所属はイタリアの大学ですが、イタリアの現状はもとより、ヨーロッパ全体の状況について話して頂き、とても参考になりました。とくに印象的だったのは、個体数推定が非常に困難で多くは過小評価していること、ハンターの数がどの国でも減っていること、そして、野生のオオカミは捕食者として役立ってはず、家畜を狙うのでむしろ有害だということでした。日本ではシカの増加は捕食者のオオカミを絶滅させたからで、オオカミを放そうと強く主張する人がいますが、ヨーロッパの例はその是非の議論に大いに参考になると思います。

韓国でもイノシシが多く都市に出没していて、日本よりも大きな被害を及ぼしているのには一驚しました。子どもにけがをさせ、警官がピストルで対応するとか、高校に出没し機動隊が出動して捕獲するといった事件を見ても、都会への進出は今や社会問題になっている様相を伺わせます。

李教授の研究は生態学の手法に則った手堅い研究で、大変参考になりました。例えば、行動圏について、ソウルでは 20 km²ですが、農村では 5.56 km²で、その違いをハビタット

の違いに基づくなど、基礎的データが明示されており、大変有用です。どんどんこうしたデータを積み上げる研究が進むことが期待されます。

アメリカのノブタ問題は断片的に聞いていただけで、ここまで大きな事件になっているとは知りませんでした。一般に外来種の導入にはよほど慎重にならなければいけないことは従来の多くの例（例えばオーストラリアのラビット、ハブ退治のためのマングースの放獣等）が示しています。スミス准教授の発表は衝撃的でした。ノブタは今や“生物テロ”化し、農業被害だけでも1,800億円という桁はずれの額には驚かされます。農業だけではなく、林業、伝染病の伝播、掘り返しによる被害など広範に渡っています。しかも年2回、4～6頭を出産するので個体数は増加の一方、分布域は今や50州に及んでいます。そこへ狩猟のためヨーロッパイノシシを放獣したので、イノブタが多数出現し、大きな被害を与えています。家畜のブタのイメージからは、想像もできない事件に発展しているのです。その対策として、ノブタ狩猟は365日可能で「全米ノブタタスクフォース」が作られて活動しはじめました。その進展に期待する所大です。

最後の横山准教授の六甲山のイノシシの管理のスピーチは、論旨明快でわかり易く好評でした。外国のスピーカー3人も、管理の方法はきわめて適切との評価で、今後の行動に自信を持つことができました。パネルディスカッションは林コーディネーターの名司会で、充実した内容のディスカッションが行われ、参考になるスピーチに満ちていました。

総じて今回のシンポジウムは実り多く、聴衆のみなさんにも満足して頂いたのではないかと思います。本センターとしても、井の中の蛙であってはならず、外国の成果や知識を広く学ぶ必要性を痛切に反省させられました。次はシカ類に関して、利用も含めたシンポジウムを企画したいものです。

最後に、たくさんの図表と写真を用いて有益な発表をして下さった M. アポロニオ教授、M. スミス准教授、李宇新教授に厚く御礼申し上げます。また、共同主催者のアジア太平洋地球変動研究ネットワーク（APN）にも感謝いたします。

兵庫県森林動物研究センター
所長 河合 雅雄

目次

主催者挨拶	1
井戸敏三	
開催趣旨	3
林 良博	
第1章 ヨーロッパにおけるイノシシの管理	5
マルコ・アポロニオ	
第2章 アメリカにおける野生化したブタの対策と管理体制	20
マーク・ディーン・スミス	
第3章 韓国ソウルにおけるイノシシの出没の現状と課題	30
李 宇新 (リー・ウーシン)	
第4章 六甲山におけるイノシシ管理の現状と課題	41
横山真弓	
第5章 パネルディスカッション ～イノシシ管理をめぐる世界共通の課題とこれから～	50
林 良博、マルコ・アポロニオ、マーク・スミス、リー・ウーシン、 横山真弓	
第6章 都市部住民のイノシシに対する意識調査 および普及啓発の取り組み	66
松金 (辻) 知香、江藤公俊、横山真弓	
シンポジウム開催概要	90
記録 現地エクスカージョンの概要	91
シンポジウムを終えて	94
辻原 浩 (APNセンター)	

主催者挨拶

兵庫県知事 井戸敏三

本日は大変暑いなか、多くの皆様にご参加いただきありがとうございます。

この森林動物研究センターは、「ワイルドライフ・マネジメント」の研究・推進をするために設置いたしました施設です。つまり、野生動物と人間との共生を目指そうというものです。

どう共生するか。それには3つの対策があります。一つは生息数を減らす個体数管理です。例えば、野生動物による被害の代表選手であるシカについて申し上げますと、森林動物研究センターの研究成果に基づき、毎年3万5千頭ずつの捕獲を続けています。生息数は徐々に減少し、現在、約14万5千頭となっていますが、被害に遭っている方々にお聞きすると、被害が減少したという実感は持たれていません。あと5年ぐらい今の取り組みを続けると、約8万頭程度にまで減少する。このぐらいが被害の減少が実感できる適正頭数ではないかと見ています。

次に、生息地管理です。シカでもイノシシでも、里に出てこなければ被害は起こらないわけです。奥山に野生動物たちの食料となるような、実のなる木をたくさん植栽するなど、生息地である森林の管理を行う方法です。

最後に、被害管理。獣害防護柵などを設置して被害に遭わないようにしようとする方法です。ところが、イノシシは柵の下を潜って農地に入りこんで、農作物やミミズを食べるために、田んぼも畦畔も掘り返してしまう。ですから、設置後の管理が大変だと言われています。

六甲山でもイノシシの被害が大きな問題となっています。これは、イノシシに餌をあげる人がいて、高栄養価の食料にありつきたいために巨大な個体が出てきて危害を加えるからです。イノシシはエサが欲しくて人に近づいてくるのですが、結果として被害が発生してしまうという状況です。アライグマも、人が山野に放棄したものが繁殖し、人家の天井裏に住み着いて糞尿の臭気などの被害を出しています。また、農家では丹精込めて作った作物が収穫直前に被害に遭うとがっかりきて、もう野菜づくりはやらないというようなことも起こります。

野生動物たちも、動物たちなりに懸命に生きていますが、その懸命な動物たちと私たちの生活域をきちんと分けて、相互に侵さない。そうした環境づくり、被害に遭わない対策をしっかりと行っていくことが大切なのではないかと思えます。

本日は、マルコ・アポロニオ先生から「ヨーロッパにおけるイノシシの管理」、マーク・スミス先生から「アメリカにおける野生化したブタの対策と管理体制」、リー・ウーシン先生から「韓国ソウルにおけるイノシシの出没の現状と課題」、横山先生から「六甲山におけるイノシシ管理の現状と提言」という内容でお話いただきます。イノシシひとつをとっても、様々な対応があるということを知って頂けるのではないかと思います。

開催趣旨

林 良博（森林動物研究センター研究統括監）

森林動物研究センターの国際シンポジウムにお越しいただきありがとうございます。

まず、なぜ今国際シンポジウムを開くのか、ということについてご説明したいと思います。実は、井戸知事からはこのセンター開設の時から、野生動物の管理に関して学術的な国際交流を深めなさいとご指示いただいております。海外の事情は、その国によって、

文化や自然環境、人と動物の共存は大きく異なります。しかし、文化の違いを乗り越えて、共通する部分も多々あります。それをお互いに学びあうということは、日本のためだけでなく、世界的にも重要です。

一昨日まで、北海道で国際野生動物管理学会が開催されており、世界中から野生動物の管理に関する研究者や実務者が日本に集まりました。そしてこの野生動物管理に関する国際会議は、アジアで初めて開催されたものです。そこで私たちは、この機会を活かして、ヨーロッパ、北米、そしてアジアでこの分野で活躍されている3名の研究者を北海道から神戸にお招きいたしました。

これまでのセンターシンポジウムは、主に中山間地域で発生しているシカやイノシシ、クマなどの動物に関する保護管理を取り上げてきました。非常に深刻な問題を引き起こしていて、まだまだ大変な問題としてセンターでも取り組んでいます。しかし、兵庫県はこの神戸をはじめ、都市部に出没するイノシシの問題も深刻化しています。この問題をいつか中心的に取り上げなければと考えておりました。そこで、今年はこの都市の問題を議論するために、各国でイノシシの管理に関するご研究をされている先生をお呼びすることにしました。

ヨーロッパやアジアは、ユーラシア大陸であり、もともと日本と同じイノシシが生息しています。特にヨーロッパは非常に長いイノシシとの付き合いの歴史がある地域ですが、最近神戸と同じような都市への出没などが発生しています。長い歴史の中で培われたヨーロッパのイノシシ管理は神戸の問題だけでなく兵庫県全体に参考になるお話か



と思います。

そしてアメリカ、実は、アメリカは新大陸でありもともとイノシシはいませんが、野生化したノブタがまさにイノシシのように問題を引き起こしています。このノブタが野生化すると場合によっては、イノシシよりたちの悪い被害を引き起こします。もともと生息していなかったところで爆発的に増加する、という状況は、淡路島でイノブタが増えている問題の参考にもなると考えて、アメリカでの事例も紹介していただきます。

そして、おとなり韓国では日本と同じような問題が始まっています。実は私は、学生時代にイノシシを研究しており、イノシシで学位をとったのは、日本で初めてであるということが自慢なのですが、当時丹波篠山のイノシシ問屋にはイノシシが韓国から輸入されておりました。それほど日本国内でイノシシの資源的価値が高まり、食用としての利用がブームになったことで、日本ではイノシシが少なくなった時代がありました。その頃はおそらく韓国では被害が少なかったと思います。現在では、日本と同じような問題を抱えているとお伺いしております。同じアジアの国、韓国ではどのような管理を始めておられるのか、お話を楽しみにしております。

そして、最後に当センターの横山主任研究員からこの神戸の地で起こっている問題をお話しさせていただきます。そして最後に会場の皆様を交えて、イノシシの出没問題を議論していきたいと考えております。

どのお話しもイノシシの都市出没問題と神戸の問題、そして兵庫県の問題を考えるうえで非常に重要な事例であると考えております。さらに、日本で起こっていることは世界から見てどうなのか、世界ではどのようにイノシシと付き合っているのか。皆さんと一緒に世界のイノシシ管理から学ぶ機会にしたいと思います。それでは、皆様、本日はどうぞよろしく願いいたします。